

原始仏教教団における出家の動機について

田 上 太 秀

目 次

はしがき

- 一、出家の意味とあり方
- 二、仏伝中にみる主なる出家の動機
- 三、原始仏教々団にみる出家の動機と

その一般的背景の意味

- (1) 総数にみる出家時の出身地・階層・年令
- (2) 出家の動機の類別
- (3) 動機とその理由

はしがき

にしてその前後に多大の差ないし逆転が行われるということ
が出来よう。すなわち発心は心の集中化である。たとえば、
無上正等覚という全体性を追求し、心がそれへ向けてかりた
てられ、それを中心にしてしか自己や自己以外のものを見た
り考えたりすることが出来なくなる心の状態である。いまま
で自己において、まったく無関心であつたものが、自己の中
核となり、周囲の他者が他者でなくなり、自己におき換えて
考えなくてはならないような状態になる。この意味において
発心は変化形式の一つといえる。

そこでこの変化の原因、すなわち動機について考え方によ
うとするのが本研究である。本研究の取り扱う範囲は原始仏教々
団の出家者たちの発心、ここでは出家と解釈して、その動機
に限定する。出家の動機といつても、深い内面的動機という
発心の現象は一つの変化形式であるといわれ、これを中心

より、多くは外的動機を取り扱うことになる。すなわち、出家を決意した時点で、その直接の動機となつたものを検討するのである。

本研究はまず序にかえてという意味で、出家の一般的の意味とそのあり方、そして仏伝に見る主なる出家の動機を指摘し概観した。本題では原始経典中、最古のものまた近いものなどの資料をもとに、出家の動機を指摘出来るものを採取し、内容によつて類別し統計をとつた。そして主なる動機についてはその多い理由を社会的背景の関りの上で検討・考察しようとする。統計では、正確さに欠けるところもあると思うが、それらについては御指導を仰ぐことにして、ここでは一応概観出来るところに落ちつくことにした。

一、出家の意味とあり方

出家とは「家より出て家なき状態に入る」⁽¹⁾といふことで、家から出で家の中には住まないことであつたようである。「家なき」というのは、農耕、牧畜などの家業を行なわぬことである⁽²⁾。これによつて一切の生産活動をやめた状態に入る⁽³⁾ことを出家といつてゐることが分る。「家」の語は、家柄・家系・家庭の意味ではなくて、家屋・建物としての家の意味

がインド一般の通例であつたようである。⁽³⁾出家が一般に身分や家庭を放棄する意味にとられてゐるが、本来の意味は単に建造物としての意味であつた。

「家から出て家なきに至る」が出家の本来の語意であつたが、実際のあり方からは、「世間から離脱する」⁽⁴⁾ことも出家の意味とされた。また母・妻・子などとの繋りを断つこと、それから脱れることも出家と考えられた。⁽⁵⁾さらに農民や牧畜民などの出家を意味する「子と家畜とを捨てて」という表現もある⁽⁶⁾。このように「家から出て」という「家」の意味とは大分異つてゐることに気づく。すなわち身分・家庭生活・職業の放棄を出家といい、大きくは世間、つまりは俗世間の離脱を出家と解釈するようになったといえる。出家は否定的行為でもなく、世俗生活への嫌悪から逃れて孤独の中へ入ることでもなかつた。それは生活のある状態から他の状態への変化であり、家庭から家庭生活のない状態へ、社会的状態から解決すべき精神的問題の多くをもつすべての人々のために当時の思想が要請した教団における友愛感情への変化であつた。⁽⁷⁾ 釈尊は出家生活を大変に喜び楽しまれたといわれる。⁽⁸⁾これは牧牛者ダニヤとの対話の中で充分くみとれることである。牧牛者ダニヤは在家生活至上主義者で家庭生活を讃美する。一方釈尊はダニヤに対して在家生活と出家生活との相違と優

劣を述べられ、在家生活はせま苦しくて煩わしくて塵の場所である、出家生活はひろぐとした野外で煩わしさがないと区別されている。だからすべて円満に清淨に清淨の行を行じようとするには家に住することはふさわしくないというのである。要するに煩わしさがあるかないかが、在家・出家の相違といえ、「家なきに至る」とはこの煩わしさのない生活に入ることのようである。そして煩わしさのないこと、これが釈尊が出家生活を讃美された大きな理由であったと考えられる。

当時、出家は一つの風潮であったといわれる。真剣に人生に悶える若者たちはみな、この出家の道をとつて修道の生活に立った。出家は、しかしながら一つの風潮であつたとはいへ、それに踏み切るためによほどの決意がなければならなかつたはずである。家庭・財産・地位など一切を放棄することは、現代の人間からみれば抵抗を感じる。実際は、このように家庭をして出家することは、ある程度財産があり富裕な家庭の人々にとってのみ可能であつたようで、『カウティリヤ実利論』⁽¹⁾は妻子親族に対する扶養の義務を規定し、妻子に物を分たずに出家することを禁止している。したがつて、出家行者になりうる人は、生活がある程度富裕な人にだけという制限がついているのである。ところが『実利論』の規定

を、出家をしてもあとのだれにも影響が及ばないと、いうように解釈するならば、たとえばまつたくの一人ものや、家庭や社会からも除けものにされているもの、不具者などは自由に出来ることになる。また、前に戻るが、出家が富裕な人たちだけということは、裏を返えせば貧しい家庭のものは出家出来ないということになる。後でみると貧困階級のものに出来者が少いという理由の多くは、このような規定に制約されているからではないだろうか。

たしかに当時、このような規定あるいは通則に従つて出家が行われたのであろうが、実際には例外も多かつたようである。たとえば身の危険を感じ、なりふりかまわず後顧の憂いはあつてもとにかく出家したもの、貧乏から逃れたい一心で出家したもの、などは明らかに通則を破つた出家の例であろう。また出家後に母あるいは妻などに還俗をすすめられた例もある。王が出家したあと臣下たちが復位を迫つた例⁽¹⁷⁾もある。王が出家したあと臣下たちが復位を迫つた例⁽¹⁷⁾もありまた夫の出家後、あるいは妻の出家後、妻あるいは夫が追つて出家した例もあり、子供が出家したあとを追つて出家した例⁽¹⁸⁾も多い。これらの例は殆んどが残されたものが生計を立てることが出来ず、また愛情にひかれてという理由で追つて出家した例である。王の場合は後嗣があるか否かにかかっていふといえる。たとえば、釈尊がカピラ城を訪問された時、後

嗣のナンダが出家し、またラーフラまでも出家したので、シユッドウダナ王は悲歎にくれ、ついに釈尊に父母の許可なくしての出家を禁止する規則の設定を要請したといわれる。釈尊は父のこの要請を承諾され規則を定めた。ところがこれにはもう一つの伝説がある。それは父シユッドウダナが出家の勧告を出したというのである。釈迦族から仏陀が出世したことを誇りに思い、釈迦族の家庭では一家から必ず一人以上出家することを義務づけた。その勧告というのは、「釈迦族の家庭から原則として一人は出家させること、兄弟五人の家庭にあっては三人出家し、四人ないし三人の家庭では二人出家し、二人の家庭では一人出家すること、男子一人きりの家庭では出家させないこと」⁽¹⁹⁾である。この勧告の結果五百人の青年が出家したといわれる。⁽²⁰⁾これが事実であつたとすれば大変なことである。というのはシユッドウダナ王はさきに父母の許可をえて出家することの規定を釈尊に要請しておきながら、一方出家の義務を王自ら勧告したことはあまりにも大きな矛盾であるからである。これも父王の実子への愛情のしるしとして、王権を利用した教団拡張への助力であつたと考えるほかはない。

右の諸例にみるように、出家は『実利論』にある規則に従つてすべて行われたとは言いがたい。一面では出家はあまり

賛成されなかつたし、また出家は自発的でなく強制あるいは義務的なされた例も少なくはなかつたことも知らなければならぬ。

出家者たちはいろいろな理由で出家したのではあるが、彼らに共通する動機というのは何であつたろうか。考えてみると、結局は二つのことに起因するであろう。一つは世俗生活の煩わしさからの逃避であり、もう一つはその煩わしさの根抵にあると考えられるバラモン教の定めるカースト支配の桎梏から離脱することである。前者の場合、煩わしさから逃れることは、孤独への憧れであり、心の平安の希望であつたと思われる。孤独であることを望むのは煩わしさのない自然の中に入り、自由に修行に専念するためであり、こよなく自然を楽しむことへの憧れであつたといえる。孤独といつてもまるつきり唯一人というのではなく、同じ教えのもとに同じく修行するものが別々に住んではいるが、共に（教えにおいて）生きているという意識があり、また同じ修行者たちでも優劣があるであろうから良き友、良き師をえらぶことになり、孤独といつてもこのような横の人間関係があることを知らなければならぬ。⁽²¹⁾したがつてこのような意味における孤独を憧れることは出家のもつとも本来的なあり方であつたろうと考える。次にカースト支配からの離脱は、多くの出家者に共通の

動機というより出家の原因となっていたといえる。これは釈尊の教えと態度の問題にかかっている。釈尊はカースト制度を廃止しようとしたと考えられているようであるが、そうではなくて、むしろ釈尊はカースト制度が俗世間の生活にとつては必要な枠であると考えていた。⁽²⁴⁾ 釈尊はこの古来の慣習を攻撃することをその使命としたのではなく、眞の内面的体験、眞の倫理的浄化を強調した。だから教団に入り道に進むことによつて、高い生活領域の一員となるものにとつては、カーストはその意味を失なうのである。⁽²⁵⁾ このような教団のあり方が一般の民衆にどのように受けとられていたかはおよそ推察できるというものである。ところがカースト支配からの離脱が共通の出家動機であるといつても、実際にはカースト支配の桎梏を一番うけているはずのシユードラ、それ以下の下賤民たちの出家が統計（後出）によると数えるほどしかないということは、一体なにを意味するのであらうか。原始仏教は商人あるいは手工業者層の支持をうけていた点が多いといわれ、また賤民たちの帰依も多くうけたであらうが出家したもののは少なかつたといわねばならない。

二、仏伝中の主なる出家者の動機

仏教教団が急速に発展し、大きな影響をもつよくなつた

理由として、当時の国王の帰依や出家があつたこと、そして当時の社会で名声と地位とをえた指導者や富豪たちの帰依や出家があつたこと、さらにもつと重要なことは集団による改宗や出家・帰依があつたこと、などを仏伝研究者たちの多くは指摘している。仏伝中、これら国王や富豪や指導者たちの出家や集団による出家などについては大事件として描写されているわけである。ここではこの仏教教団の形成途上において、その形成に大きな意義と役割とをもつた人達の出家の動機をとりあげて、その特色を考察するわけであるが、事例の選択には人により異議はあらうが、一、五人の比丘の出家、ニ、ヤサとその友人の出家、三、三〇人の青年の出家、四、三カツサバ兄弟の出家、五、舍利弗・目連の出家、などの五例をあげて考察することにした。

（1）五人の修行者の回心・出家

五人の修行者はもとカピラ城では釈尊の従者であった。主人である釈尊が出家された時、かれらは不本意であつたであろうが、従つて修行者となつた。修行中、五人は修行に対する見解の相違から釈尊と別れてしまつた。

月日が流れ、釈尊はブツダガヤーで開悟された。いま、釈尊はブツダガヤーから三〇〇キロもある道程を歩いて一路ベナレスへ、五人の修行者に自分のえたさとりの内容を説法

するために向われた。途中、すれちがいのものに説法されたこともあるようであるが、とにかく釈尊は傍目もふらずにベナレスの五人の修行者目あてに歩まれたという。それはなぜであろうか。釈尊はさとりの内容を世人に直接に公開しようとしたのではなく、特殊な苦行者たちの間に少しづつ教えを説きひろめようとされたのである。⁽²⁸⁾ 釈尊が最初の説法において呼びかけたのは、大衆ではなくて五人の修行者たちであつた。ここに原始仏教がそもそもその出発から本当にどういう性格のものであつたかがうかがわれるのである。

かくて釈尊は五人の修行者のところに行かれた。⁽³⁰⁾

釈尊は追憶の中でいわれた。⁽³¹⁾ かれら五人は約束して私を暖かく迎えてくれなかつた。しかし私が近づくにつれて、五人のものはおたがいの約束を守ることが出来ずに接待をしてくられた。かれらが「きみよ *avuso*」と呼びかけたので、私は修行者らよ。如来に呼びかけるのに「きみよ」の呼びかけは正しくない。⁽³¹⁾ 如来は尊敬されるべき人・正覚者である。私は不死をえたのだ。教えよう。教えられた通りに行えれば、必ず無上の清浄行の究極をこの世において、みずから知り、証し、体現するに至るであろう、と。

このように釈尊が五人の修行者に語りかけることにより、五人はついに傾聴し理解しようとする心を起したという。そ

して釈尊は説法をされ、かれらを回心させたという。説法が何であり、その内容が何であれ、五人の修行者を回心させたものは釈尊の自信である。自分が如来であり尊敬を受けるべき人であり正覚者であることを確信をもって宣言された。そして自分の教え通りに行えば、必ず無上のさとりをこの世において体現するはずだと予言された。この自信の堅固さはまさに金剛石にたとえられるもので、いかなる人の心の殻をも打ち碎かずにはおかないものである。釈尊は疑いなく特殊な力と訴える何ものかを持つておられたに違いないのである。これにうたれて五人の修行者は回心し、また新たに出家したといえる。

(2) ヤサとその友人たちの出家

ヤサは良家・富商の子で、柔軟で洗鍊された性質の青年であつた。かれは冬・夏・雨の各季節のための三宝殿に住み、男を交えない妓樂にもてなされて日々を送つた。

ある日このような生活に厭離の心が起り、墓場のように感ぜられる欲の家を逃げ出し、「實に、ああ悩ましい。ああ煩わしい。」⁽³³⁾ と叫んで、鹿野園に赴いた。⁽³⁴⁾ そこで経行中の釈尊に会い聞法して、ついに出家したといわれる。ヤサの出家の動機は間接的には釈尊の説法によるものであるが、直接の原因となつたものは、歓樂生活への嫌厭感であつたといわねば

ならない。かれが「實に、ああ惱ましい、ああ煩わしい。」と叫んだことは、如実に心境を吐露しているといわねばならない。

ヤサには友人が多かった。その中でベナレスの商人代表と副代表の家の息子たち四人がヤサの出家したことを聞き及び、随つて出家したといわれる。パーリ律藏では、かれらはそれはきっと下劣な教えと戒律ではないにちがいない。それは下劣な出家生活ではありえない。そこにおいて良家の子ヤサが髪も鬚を剃り落し、黃色い衣をまとつて、家から出て出家して遍歴行者となつたのであるから⁽³⁵⁾と思つたといわれる。四人の青年は良家・富商の子ヤサが出家した教団であるから、きっと下劣でないと判断し出家を志したのである。下劣でないと考えたところには推察するに階級意識をはつきりと汲みとることが出来る。ヤサが何によつて出家したかは知らずに、というより問題にしないで、ただ同階層、あるいは同族という仲間意識から出家を志したもので、教えが秀れているからという意識で出家したものではないと考える。かれらは当時では金持の息子たちで、新しいものにはすぐとびつき、何でも試してみたがったに相違ない。またかれらはひま人であつたにちがいない。だから仲間の一人が何かめずらしいことをしたりすれば、まねたに違ひない。だ

この人の友達が出家したことを聞いたヤサの名門・旧家出身の友達五十人が、また、それはきっと下劣な教えと戒律ではないに違ひないと、随つて出家したという。

以上、ヤサとかれの友達の出家とを述べたが、要するにヤサの出家は歡樂生活の煩わしさと悩しさからの逃避であり、友達の出家の動機は同族あるいは仲間意識と一種の新奇好み、あるいは興味から、そして少々求道の氣持も加わつていたと考えることが出来るようである。

(3) 三〇人の青年の出家⁽³⁶⁾

釈尊がベナレスからウルヴェーラーに向われる途中で、一人の淫女を探し求めて徘徊している青年たちが、釈尊にその女の行方を尋ねた。そこで釈尊は婦女を尋ねることと自己を尋ねることと、どちらが勝れているかと反問される。かれらは自己を尋ねることが勝れていると答え、説法を聞き、自己の本来面目に醒め出家を決意したという。

(4) 三カツサバ兄弟の回心・出家

マガダ国のウルヴェーラー村に三人の結髪のバラモン兄弟がいて、呪力の故に当時在家の間で非常に尊信をあつめ、有

力な代表的教団があつた。釈尊がベナレスで転法の第一声をあげたにも拘わらず、ガヤー地方に引き返して来た目的とは何であったか。その目的はよく理解出来ないが、おそらく三カッサパ兄弟の教化にあつたようである。⁽³⁷⁾ すなわち「かれらを帰依させなければ、自分の教えがひろがるのは不可能だと考えていたのである。⁽³⁸⁾」

ところで釈尊は三カッサパ兄弟をいかにして帰依させたのであろうか。

かれらは火に仕える儀礼を行なつてゐたが、端的にいえば釈尊は彼らに對してあらゆる種類の神通を行い、かれらを制服させたのである。神通くらべをして勝利をえた。三兄弟は逆に勝負に負けたのである。

兄のウルヴェーラーとかれの弟子たちが剃鬚髮したのを見た弟たちが「この方が優れているのか」と問うたのに対し、「この方が優れているのだ」と答えたので、弟たちとかれらの弟子たちは一緒に剃鬚髮して出家したという。ここで兄カッサパが「この方が優れている」と述べたことは、神通力による敗北を暗示しているものと解釈するのである。

(5) 舍利弗・目連の回心・出家⁽⁴⁰⁾

王舍城にサンジャヤというバラモンが二五〇人のバラモンをつれて住んでいた。そしてほかに舍利弗・目連がいた。

ある時、舍利弗は、托鉢中の仏弟子アッサジに会い、釈尊の教えを聞いて感服し帰依するに至つた。また目連も同様にアッサジの説法によつて帰依することになった。かくて二人の高弟は師のサンジャヤの痛憤をあとにして、二五〇人のバラモンをつれて釈尊のもとに赴くのである。

一方、釈尊は二人の修行者舍利弗・目連が遠方からやつて来るのを見て、そばの弟子たちに次のように言わたった。「修行者らよ。ここに二人の友がやつて来る。コーリヌ（＝モッガッラーナ）とウパティッサ（＝サーリップッタ）だよ。からはわたしの弟子の双璧となり、最上の立派な兩人となるであろう。」（中村元訳）と。舍利弗と目連が遠方からやつて來るのを見て、あの二人はわが二大弟子であると釈尊がいわれたことは、宗教的に重要な意味をもつてゐる。この二人ははじめからすぐれた宗教的能力を生れつきもつていたとしか考えられない。初見であり、会話もしていないうちから、二人の偉大さを釈尊はみとめておられたことは何か神秘的な意味をもつてゐるといえる。二人の出家の動機はアッサジの説教によつたのであろうが、実際には、釈尊が口もきかないうちから二人の偉大さとその素質を見抜いておられることをみれば、二人の出家の間接的原因は仏弟子となる種性をすでに持つていたことを仏伝は述べてゐると解釈する。

(6) 小結

右の五例をもつて仏伝にみる主なる出家者たちの動機とみたのであるが、これらをまとめると、

一、釈尊の自信と尊厳さとにうたれて発心したもの、い

なれば仏威力にうたれたというほかない、

二、歓楽生活への嫌悪、また世俗的欲樂からの厭離、端的に世俗の煩わしさからの逃避として出家したもの、

三、同族、あるいは仲間意識から、一面で興味と反面では

求道との相伴ばする動機から出家したもの、

四、日常的行動に対する反省と愚痴の自覚による出家のもの、

五、神変威力（神通）の競争に負け、その神通力を取得し

たいために出家したもの、

六、仏弟子となる素質を生れつきもつていたことで出家したもの、

などの六種の動機を指摘出来よう。これら出家の動機のいくつかは後述の統計の中においても詳細に考察されるが、この六つの動機は後の大乗仏教における発心の類型的因縁の中でも主要なる位置を占めるものとなる。

三、原始仏教教団にみる出家の動機と

その一般的背景の意味

前節までは出家の一般的あり方と仏伝にみる代表的な出家の動機を考えて来たが、ここでは仏伝及び最初期の資料において得られる出家者たちの動機の種々例を集計し、統計上から考察しようとするものである。

事例の多くは『テーラ・テーリー・ガーター』⁽⁴⁾から主に抽出

し、阿含經・スッタニ・パータなどからは補足的な事例を採集した。

採集に当つて動機が明確に指摘されうるものだけをとつたために、なかには人名がなく、人というものの動機もとり上げた。また資料によって同一人物の出家の動機が相違する場合もあつたが、その場合は、古い資料の記述をとつた。ここで最も注意しておきたいことは、出家という時点が釈尊の教団に入団した時点をもつて出家とすることである。たとえば、五比丘が釈尊と同時に城を出て、出家をしたといわれる場合の出家は、ここでの出家の意味に該当しないのであって、五比丘がベナレスにおける初転法輪によつて帰依し入信出家したという時点をもつて、かれらの出家とした。舍利

弟、日連の場合も同様である。だから、ここで採集した事例ではあくまで仏教教団に入団・出家した時点での出家の動機を意味している。

右のような方法で採集した事例は総数三五六例になつたが、この中には仏伝にみるいわゆる一二五〇人の修行者のうちの数人が含まれているかも知れないが、これとは全く無関係である。しかしヤサの友人五〇人の集団的出家は一応まとめて総数の中に入れた。実はこの統計では十人以上の集団的改宗あるいは出家の例は採用しない方針であったが、ヤサの友人五〇人の出家は三迦葉兄弟の弟子や舍利弗・目連の弟子などの数からすれば僅少であり、また単なる友人関係でしかなかつたものそして在俗のものどもが、随つて出家した事実はまたそれなりに出家のあり方として価値があると思い、特例として採集した。だから統計の上で、それが加算された項目では特に高い数値を示すところもあるが、その場合この特例を考慮して表を見てもらいたいし、またこの五〇人を減算した数値も併せて考えてもらいたい。

(1) 総数にみる出家時の出身地・階層・年令

総数は三五六例である。この数は出家時の出身地・階層・年令の地図をどのように示すのだろうか。まず、出身地と階層との関係を示す表をみよう。

〔表
I〕

	(そ の 他)	チ ヤ ン ダ ラ	シ ュ ー イ ド ラ	ヴ ア イ シ ヤ	ク シ ャ ト リ ヤ	バ ラ モ ン	階層
計							出身地
129		5	0	78	10	36	王舍
117		3	4	58	9	43	舍衛
25		2	1	2	16	4	羅迦毘
15		3	0	2	8	2	離毘舍
70	(9	0	22	27	12	その他
356		22	5	162	70	97	計

(註) 出身地欄の王舎・舍衛・迦毘羅・毘舍離は、それぞれ主なる「城」の名であるが、これは単にその所在国の中にあるため、便宜上、掲げたものである。実際は、その近郊、あるいは、その所在国をも指示している。「その他」は、以上四城以外また不明のものを含む。階層欄のチャンダラ(その他)とある中で、その他といふのは、階層が不明のものを含む。といつてもそれは、表中に(9)とある数字の中に含まれるものである。(9)は全く、出身地も階層も不明のものである。78の数字はヤサの友人五〇人が含まれている。

まず出身地をみると、王舎城出身のものが三六%で一位で

舍衛城出身のもの（補I）が三三%で第二位である。これは釈尊が王舎、舍衛の二城を中心に布教伝道されていたことを物語るものである（補II）。迦毘羅城の出身者はさきの二城の数値から比較すると非常に少い。前節において釈迦族から出家者が五百人出たとあつたが、ここではその数の影響は見られない。⁽⁴²⁾迦毘羅城出身者が少いことは何を意味するのだろうか。

階層別にみると、ヤサの友人五〇人を差引いてもヴァインヤ出身者がかなり多い。バラモン出身も多い。前者が四六%後者が二八%である。クシャトリヤ出身者が一九%である。これで見る限りでは教団の出家者の構成はヴァイシャとバラモンの階層の出身者で成り、それにクシャトリヤ出身が少々ということになる。一二五〇人のバラモン出身者を考えるならば、仏教教団は殆んどバラモン出身者によつて動いたといえ、悪く言えばバラモン教が仏教と改名したかの憾さえある。表中最も注目すべきものは、シユードラ、及びチャンダラなどの下層階級の出身が非常に少いことである。この辺の事情について、岩本裕著『仏教入門』では四姓に対しても教団の門戸を開放したが、賤民の出身者には在俗の信者であることは歓迎したにもかかわらず、出家することは許さなかつたのではないかと考えると述べた後、「事実生まれたとき以

来、卑賤の境遇に置かれて蔑視と虐待の中に生きてきた賤民出身者が教団にはいって、四姓平等の原理にのつとつて待遇されたとて、上位のヴァルナの出身者に対するコンプレックスは一朝一夕になくなるものではないであろう。そこに自然に卑屈な態度の見られることは人間として当然なことであり、結局そこからかれらみづからの疎外といふことも生まれて来るであろう。⁽⁴³⁾と判断されているが同感である。ところが著者はだからそのようなことのないように、ブッダは賤民出身者の出家を許されなかつたのではなかろうか、と解釈されているが、これに対しては賛成しかねる。というのは表にあらゆるに僅少ではあるが、出家者がいたのであり、あとに掲げる動機別に見る表でも分るように見仮・勧誘（強制を含む）・貧乏などの理由によって出家した賤民出身者が具体的な事例としてあるからである。境遇による卑屈さが賤民の出家者が少い理由の一つとして考えられるのであるが、いま一つの理由には教団内の人間関係にもあつたといえる。それは教団内では確かに階級の区別はなかつた。区別があつたといえば、年令⁽⁴⁴⁾と知識とにおいて差別があつたといえよう。教団内では若くとも智慧のある者を重んじたようである。年令においてではなく智慧のある者という点で賤民出身者は上位三階層の出身者に劣っていたといえよう。蔑視・虐待の境遇の中

で何の教養修養が積まれようか。そのようなものたちが出家したところで所詮賤民出身者はそれだけの評価しか受けなかつたというほかはないであろう。このような事情も賤民出身の出家者が少い理由ともなつてゐるのではないだろうか。

つぎに出身地と階層との関係を考えてみよう。釈尊は王舎城と舎衛城との両都に最も長く滞在されたために、自然、信者や出家者が多く出たことは表によつても分かる。バラモンの出家者は舎衛城の方がやや多い。それは舎衛城附近に当時バラモンの本拠地があり、バラモンたちが多く滞在していたといわれ、釈尊は教義の上で彼らと対決せねばならないところから、敢えて彼らにはたらきかけたといわれる。⁽⁴⁶⁾ 従つて釈尊によつて帰服させられたものも多かつたといえる。王舎城・舎衛城のいずれも大国の首都であり、バラモン教的伝統の束縛の最も弱いところであつたが、バラモンたちがかなり住んでいたことも表によつて知られる。クシヤトリヤ出身が王舎城・舎衛城ではバラモン・ヴァイシャに比して非常に少いのに、迦毘羅城では階層中最も多い。毘舍離城においてもやはりクシヤトリヤ出身が一番多い。一体これは何を意味するのだろうか。当時、マガダ・コーサラは二大国としてインドに君臨していたので、王族・武士族は無敵の安心感があつたのである。信者とはなつても、だから、出家者となつて世

間を捨てるほど不安と危機感とをもつていなかつたのではないか。一方、釈迦族はコーサラ国の属国であつたため、常に小国の悲哀をなめ、政治的陰謀が絶えなかつたに違いない。これはリッチャヴィ族の場合も同様である。事実、シャカ族はコーサラ国に、リッチャヴィ族はマガダ国にそれぞれ亡ぼされた。このような小国のクシヤトリヤ階層のものが出来したくなるのも人情というものであろう。王舎城・舎衛城ではヴァイシャ出身の出家者が半数以上もある。これは両首都とも当時交易が最も盛んに行われたところであり、王舎城の連山は金属、特に鉄を産出し、また王舎城の位置が金属の商業路にあたり、技術が最も進歩した首都として王舎城はあつたこと、舎衛城は当時諸々の交通路の集合点であり、商業の中心地で物資の集散地であつたことなどが、莫大な金錢を蓄積した商業資本家の抬頭を齎らし、彼らの中から出家者が殆んど世欲からの逃避を理由に多く出たと考えられる。⁽⁴⁸⁾ そしてそのヴァイシャ出身の大部分はもとは商人であつたと考えられ、農夫だった人がどれだけいたかははつきり分からぬ。⁽⁴⁹⁾ シュードラ出身では舎衛城のものが一番多いことも注目すべきである。⁽⁵⁰⁾

つぎの表は年令別のものである。

〔表Ⅱ〕 (%)

老 人	一・六	(註) 「老人」 = 六〇才以上。
大 人	二六・六	「大人」 = 結婚生活者そして三 一才以上の独身者も含む。
青 年	六八・五	「青年」 = 独身者(十六才)~三 〇才)
子 供	三・四七	「子供」 = 十五才以下

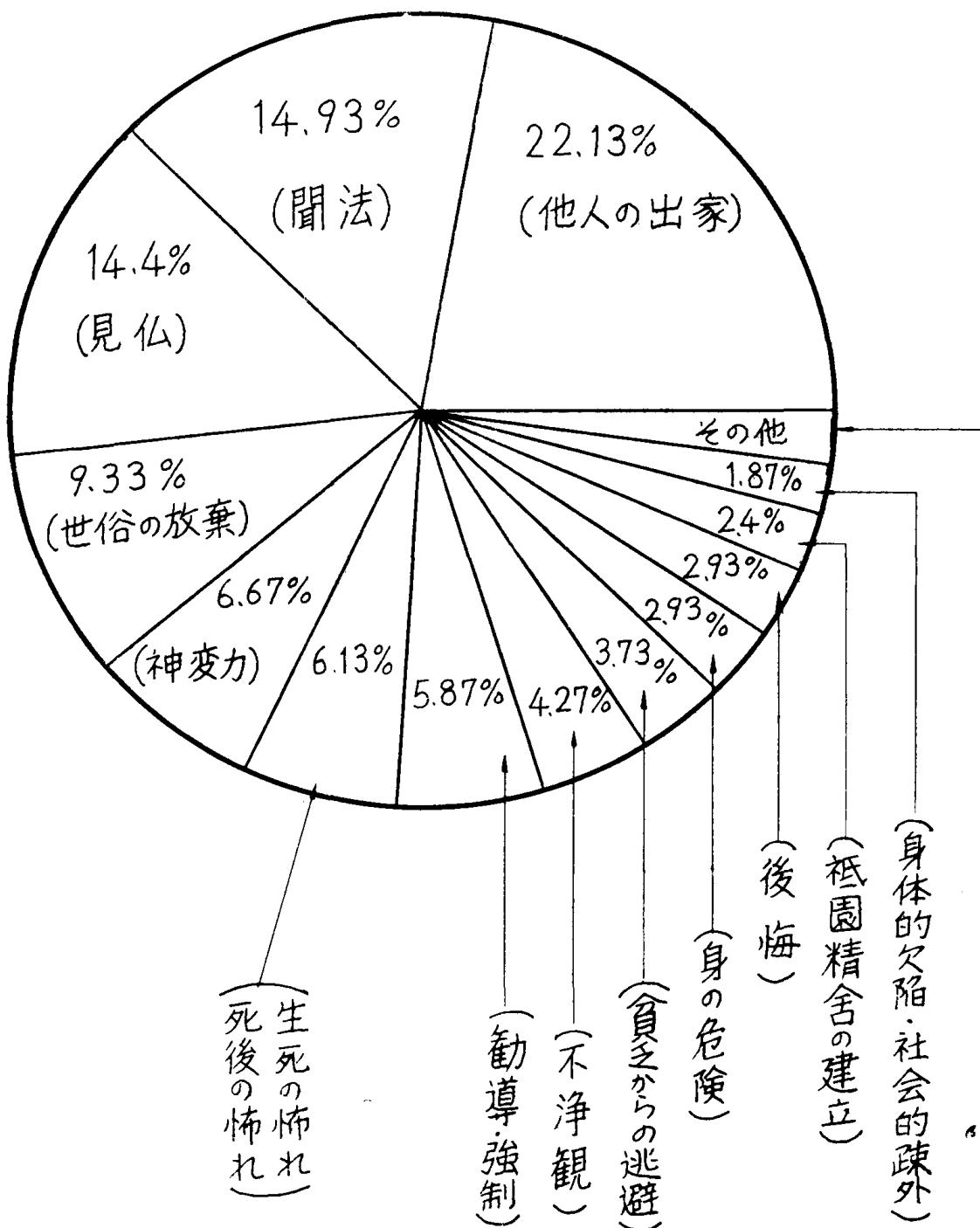
〔表Ⅲ〕 (%)

バ ラ モ ン (男)	ク シ ャ ト リ ヤ (男)	二 六
シ ュ ー ド ラ (男)	シ ュ ー イ シ ャ (男)	三
チ ャ ン ダ ラ そ の 他 (男)	チ ャ ン ダ ラ そ の 他 (女)	一 八
(女)	(女)	二
○	○	四 五

青年時の出家者が圧倒的に多い。その中でも男子の数値が他を圧している。これでいうと出家は正しく青年期の現象である。石神徳門氏の研究になる高僧の出家の年令のグラフもある。⁽⁵⁾老年時の出家者がないに等しい数値を示しているが、仏教の教えが老人向きでなかつたとか、老人の関心を惹かなかつたとかいう理由ではなくして、考えるに沙門の生活が体力の面で老人には、不向きであつたのではないか。家なき者の修行生活はきびしく老人には到底耐えられるものではなかつたと考える。このような理由で老人たちは在家信者でいるほうをえらび、出家生活をあきらめていたのであろうと推察される。

表Ⅱの中、青年の階層を調べたのが、つぎの表である。

(同情)(受記)(他宗からの転向)



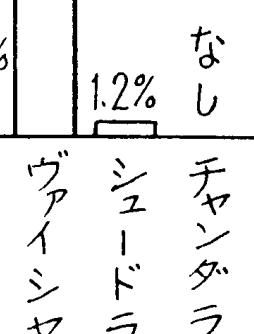
(2) 出家の動機の類別
総数三五六例を動機の内容に従つて類別した結果、十六項となつた。グラフによつて各項目の比率をみたのが上掲のものである。

(註) 「他の出家」は他人が出家したのを聞き及んだとか、身近かなものの出家を見てとかによる。発心出家の例である。「聞法」は説破されたもの、傍聴によるものなどを含む動機をいう。「見仏」は「仏を見て」と簡単に解釈してよい。ここでは「見た」内容が問題となるわけである。とにかく「見た」ことの事実が動機となつた例で

ある。「神変力」は神通を釈尊が示されるのを見たとか、釈尊と神通力の競争をして敗北したとかの動機の例である。「祇園精舎の建立」とは精舎を見たことが動機となつた例である。第一位の「他の出家」には前述のようにヤサの友人五〇

人の集団出家が含まれている。この数字を差し引けば第三位になるので、この点も考慮してこのグラフは見てもらいたい。

円グラフに示された順位に従って、各項目における階層と年令について調べたグラフを次に挙げてみよう。



1図

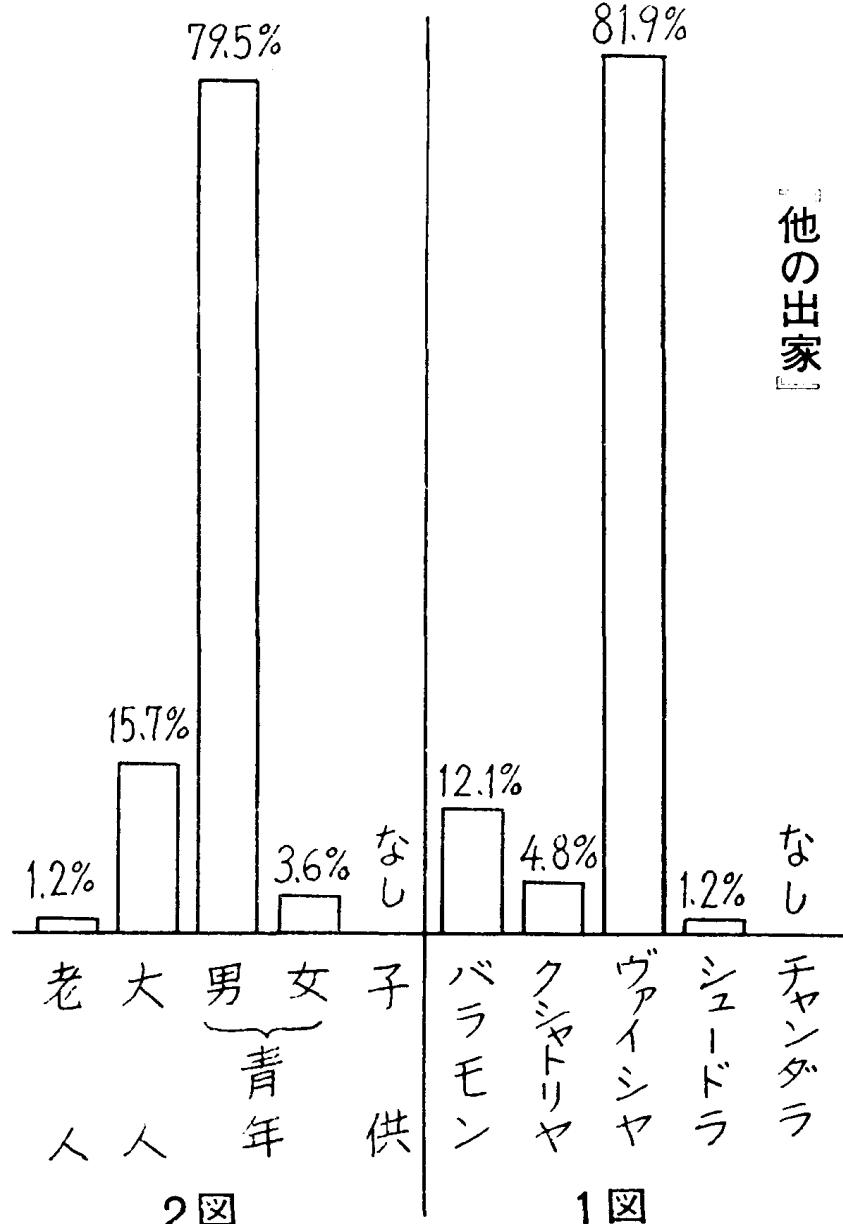
「他の出家」

ヴァイシャの場合は、サヤの友人五〇人の集団出家が含まれているので特に目立つことが多い。それを除いて見てもやはり多教であることが分る。下賤民は微少。

年令別ではやはり、青年男子が圧倒的に多いが、これはヤサの友人五〇人が含まれている。「大人」の例も多いのは、肉親の出家や夫あるいは妻などの出家に従つて追つて出家した例が多数を占めているからである。老人が微少。

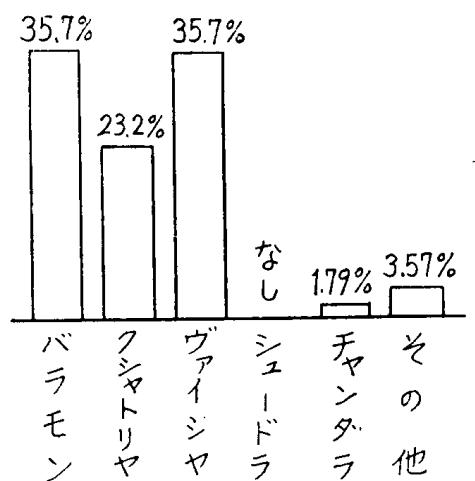
「聞法」

階層別では、バラモン・ヴァイシャが同比で第一位。かなり高い。バラモンは、説破せられて出家した例が多く、ヴ



2図

聞法



1図

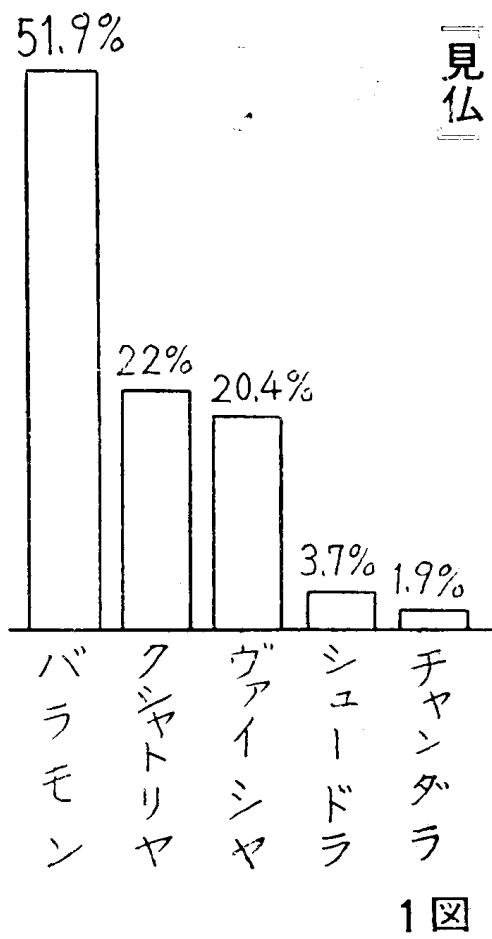
アイシャは、新奇好みで直接説法を聞きに行つたとか、純粹な気持で話を聞きに行つたとかによる出家の例が多い。下賤民には聞法の機会がなかつたというより、与えられなかつたのであらうか。微々たる数字を示す。年令別では青年男子が圧倒的に多い。説破せられたものがかなり多い。子供の例が少々あるのは、親などにつれられて説法を聞いているうちに出家した例が多い。

「見仏」

ここではバラモンの例が圧倒的に多いのが目立つ。彼らには良き師と仰ぐ風貌をもつたものがいなかつたのであらうか。くわしくは後述する。

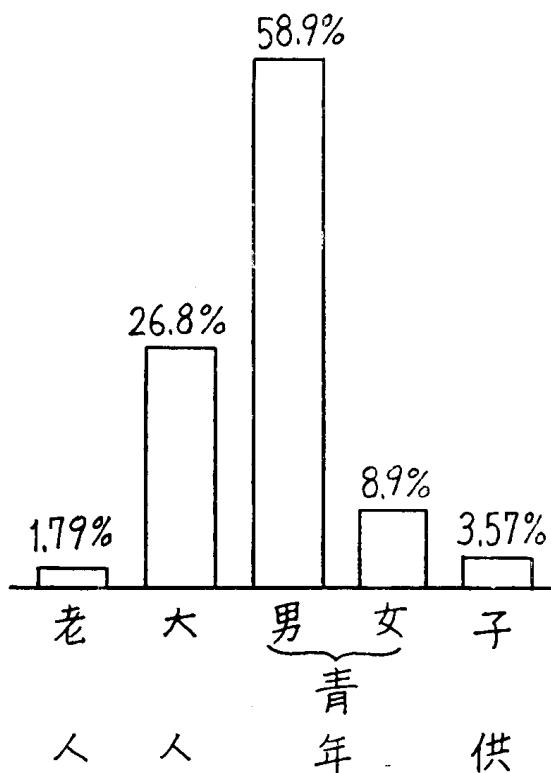
下賤民にかなりの数学が見えるのは注目すべきであらう。

見仏

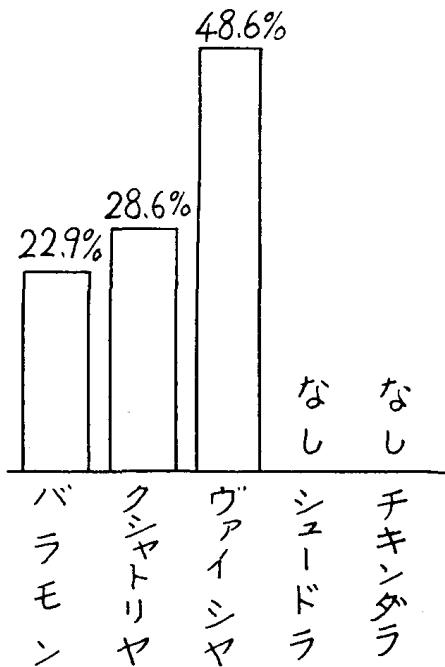


1図

58.9%



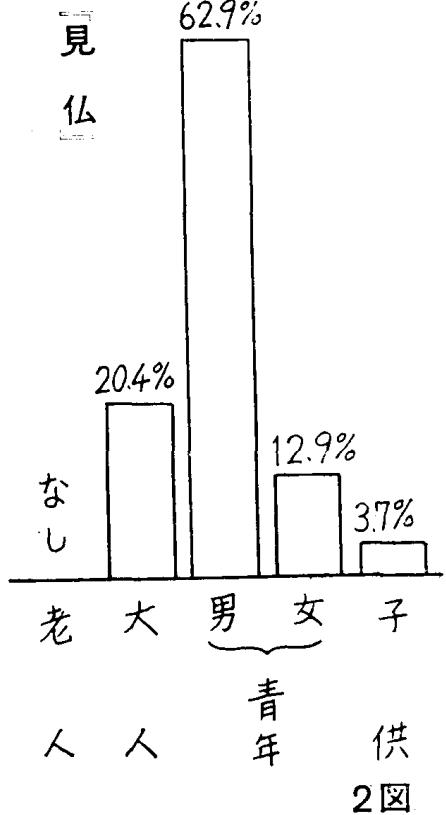
2図



1図

「世俗の放棄」
ヴァイシャが半数に近い。クシャトリヤがこの項目において
意味するのだろうか。

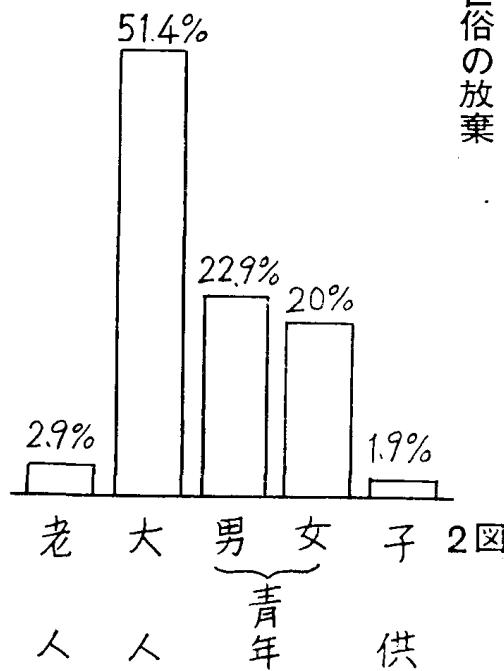
年令別では、青年男子がやはり多い。老人に絶無なのは何を



2図

世俗の放棄

てはじめて第二位を占めた。豪しゃな生活を送っている商人たちと王侯・武士たちとにおいて、この動機が多いことは面白い。予想された下賤民の高い出家率がここでは皆無というのは理解に苦しむのである。年令別では「大人」が他を圧して多い。青年の例も多いが、「大人」の場合は、その動機の内容においてかなりの相違を示している。



「神変力」

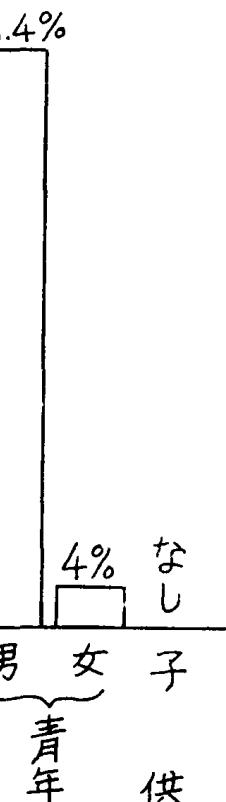
バラモン・クシャトリヤが多い。バラモンは神通力の勝負に負けて出家したものが多々、クシャトリヤでは神変を見て驚いたり、また武士はその神通力を取得したいという動機からなどの出家の例である。下賤民にはあまり興味がなかつたのか微少である。青年男子が圧倒的に多い。女子は興味がな

あるいは無縁のものと考えたからであろう。

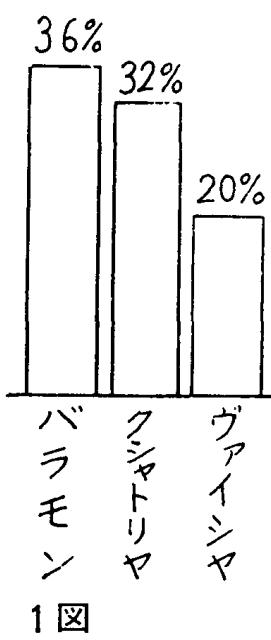
「死・死後の怖れ」

ヴァイシヤが過半数を示している。富裕な生活を送るもの

2図

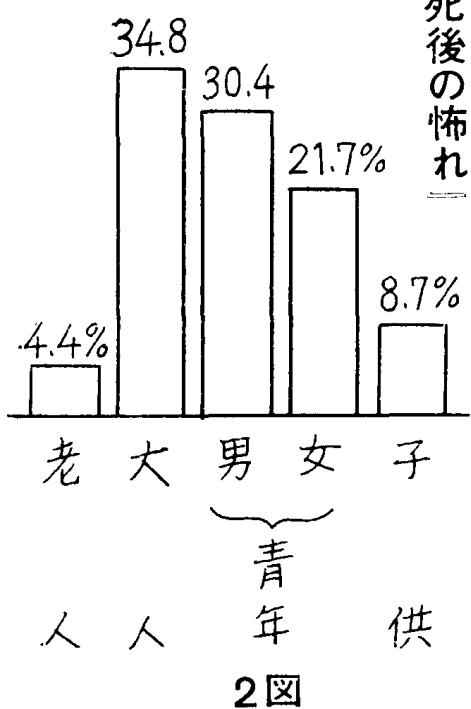


「神変力」

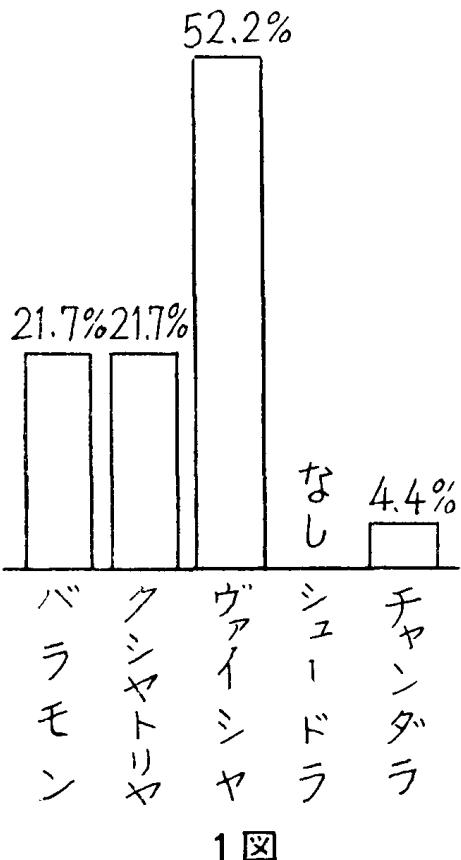


1図

生死・死後の怖れ



2図



1図

かつたのであろう。少い。大人にも例がかなりにある。老人・子供に皆無なのは、きびしい修練によってしかえられない神通力を習得することはおそらく老人・子供には無理なこと

勧導・強制

1図

にこの項目の動機が多いことは、意味深いものがある。下賤民にもあまり縁がないのであらうか。青年の例が過半数を占める。老人は逆に最低である、矛盾するような現象であるが、ここで見る限りでも、仏教は老人向ではなかつたのではないか。

「勧導・強制」

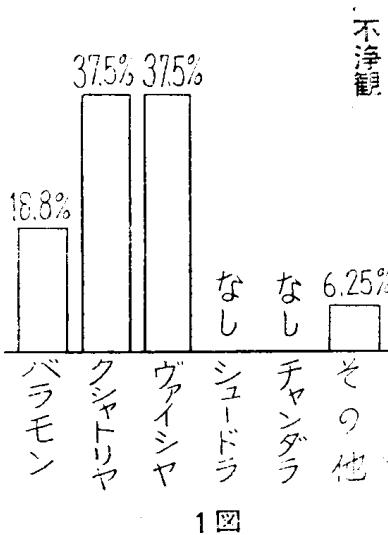
ヴァイシャの例が多いのは、青年と子供とが半々に含まれているからである。チャンダラがかなり多いことが目立つ。この下賤民などには働きかけがないと自発的に出家することが少いため、自然に引っ込んでしまうのであらう。下賤民には働きかけ、あるいは強制による布教が効果的なのかもしれない。子供の例は殆んど強制によるものである。

「不淨觀」

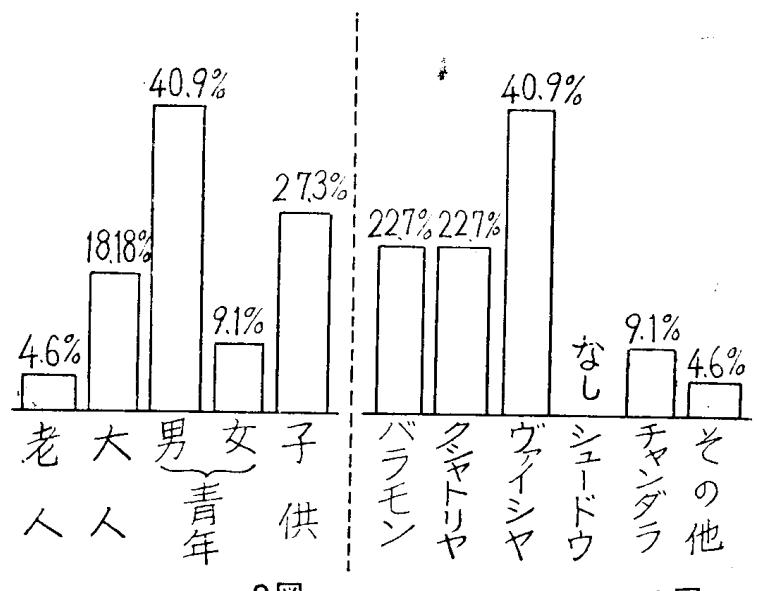
クシヤトリヤ・ヴァイシャに例数が多くて、下賤民に皆無というのは興味深い。ここで見る限りでは「不淨觀」という思想は、下賤民の中から出て来たものでなく特權階級のもの間から生れた観念であろう。人が多い。この中では女子が多い。青年女子の例も多い。年令別では、不淨觀は、女子に多い傾向があるようである。

「貧乏」

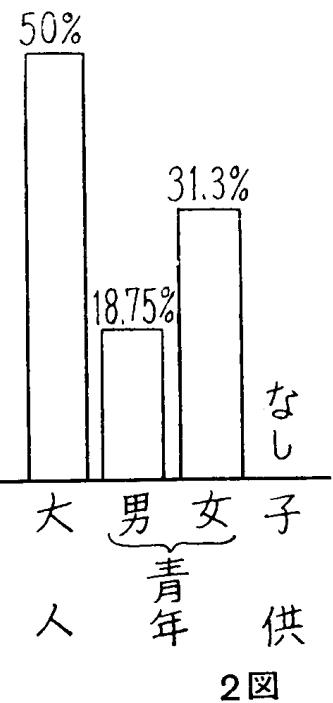
貧乏から逃避したいという理由で出家した例では、シャー



1図

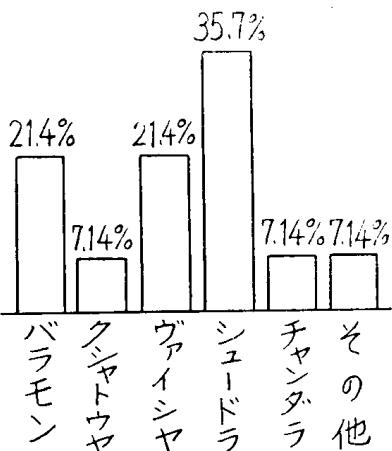


2図

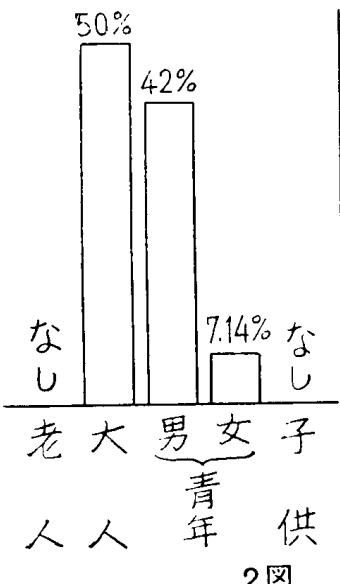


2図

貧乏、その他



1図



2図

ドラが第一位である。この項目においては、下賤民の例が他の階層と比較してかなりに多くなっている」とは注目すべきことである。下賤民の出家の最大の理由は、純粹に貧乏から離脱したいことにあつたといえるようである。シユードラの場合青年の例が多い。大人の例が多いのは生活苦から逃避したいと願つた男子の場合が殆んどである。

(3) 動機とその理由

右にグラフをもつて上位九項目を紹介したのであるが、あとの項目は僅少であるため省略した。一応、グラフによつて概観したので、つぎにさらに右のうち上位五項目について具体例をあげ、そしてその動機の多い理由を一般的な見地から考えてみたい。

(イ) 他の出家

〔具体例〕

○ヴァツダハア(男)はブルカッチャ市の人でヴァイシャ出身。母がさきに出家し、さとる。彼は母の誘いもあつたのであろうが、母への愛情から追つて出家した。(Thera G.

335—339. comy.)

○ダンマサヴァピター(男)は百才のとき、子供のダンマサヴァの出家を見て、「彼は若いときに世間をはなれた。自分も出家しないでおる」とはない。」といつて追つて出家

した。(Thera G. 108 Comy.)

○レヴァタ・カディラヴァニヤ(男)は舍利弗の弟。母が結婚をすすめたが長兄舍利弗が出家しているので、自分も出家しなければならないと思⁽⁵²⁾て出家した。(Thera G. 42 Comy.)

○シーヴァカ(男)はカピラ城のバラモンの子。ヴァナヴァッチャが出家したのでこれを聞いてシーヴァカの母が出家した。そこで母に追従して彼も出家した。(Thera G. 14 Comy.)

○スンタリー・ナンダー(女)は釈尊の異母妹で、「私の兄は王位の継承を捨離し、世間を出離し、ブッダとなつた。彼の息子ラーフラも出家し私の兄弟のナンダ王、私の母マハーペジャーペティも出家した。今、家について私は何をしようというのであらうか。私は出家しよう。」といつて釈尊のもとに走つた。(Theri G. 82—6 Comy.)

○ソーナ・ポティリヤップッタ(男)はシャカ族の村長の息子で、のちシャカ族王バッディヤの軍隊の大将となる。ある時、バッディヤ王が出家したので「王をえ國をすて出家したのであるから、自分もまた」として出家した。(Thera G. 193—4 Comy.)

右の数例は代表的なものであるが、殆んどは信仰によつて

ではなくて、肉親への愛情から出家したものとのようである。

またこの動機によるものに多くは集団的な改宗あるいは出家を齎らす事例があることに注意すべきであろう。たとえば、再三出てくるヤサの友人五〇人の集団出家、また三迦葉兄弟の弟子千人の集団改宗、さらにサンジヤの弟子五百人が舍利弗、目連について集団改宗した例などは主なるものとしてあげられる。ミツバチや、アリの社会にみるような、女王を中心にして働く昆虫の習性のように、人間も一つの信条とか、愛情とか、友情とかを支えに一人の師あるいは友を中心に集団をなしているのであるから、一人の中心となる人物が出家したとなれば、随従して出家するものが頻出することは考えられる。とくに封建的支配の行われた古代社会においてはこの現象がよく見られたのだと考へる。

(ロ) 聞法

〔具体例〕

○ヴァッダマーナ(男)はクシャトリヤで貴公子であった。はじめは教団の供養者であった(Thera G. 40 Comy.)が、のち日連に教説され聞法し出家した。(Thera G. 1163 Comy.)

○ヴァッダマーナ(女)はヴァイシャの良家の女。一男をもうけたが、ある比丘が来て説法したのを聞き、子供を親

戚に托して出家した。(Theri G. 204—212 Comy.)⁽⁵³⁾

○ヴァッチャ・ゴッタは王舎城の富裕なバラモンの子。バラモン学を学び、解脱を求めて遊行僧となる。ある時、釈尊に出会い、質問したがその回答に満足し出家した。(Thera G. 112 Comy.)

○ニガンタ・ナータプラッタがマガダ国王子カバヤをけしかけて釈尊を論難しやりこめようとしたが、失敗し、この王子はついに帰服し出家した。(MN. vol. II, pp. 392—6)

○マヘーベンタカ（男）はヴァイシャ出身の富裕な長者の娘と父の召使の一人との間に出来た子。祖父とよく釈尊の説法を聞きに行つた。時に内面的に信をえて、ついに出家した。偈は過去の回想である。(Thera G. 510—517 Comy.)

○ディーガナカ（男）は外道の修行者であった。「私はすべての見解をみとめない」と立論したが、釈尊に論破せられて出家した。(MN. 74 Dighanakha S. 『雜阿含經』三三四・三一〈大正二卷一四九上〉)

○ジャンブカ（男）は極貧の家に生れ、糞尿を食した。のちアージーヴィカ教徒となる。五五才の時釈尊の説教を聞き回心し出家した。(Thera G. 283—6 Comy.)

供養者がたびたびの聞法で出家した例、傍聴することにより出家した例、説破せられて出家した例、子供の頃から聞法

してじるうち出家を志した例などが代表的なものである。供養者が出家したものにはヴァイシャ出身が多く、説破せられて出家したものにはバラモン出身が多い。少時より聞法して長じて出家したものには、良家の子供が多い。

聞法の動機が実質的に（やさの友人五〇人の集団出家を除いた場合を考えて）一番多い理由は何であろうか。

大衆に対して説教することは、当時のインドではかつてないことであったようである。たとえば、ウパニシャッドの哲人たちは教授する相手を自分の子供とかあるいは教えをうける資格あるすぐれた人々に対してのみ教えを説いたといふ。⁽⁵⁵⁾またコーヒッチャというバラモンはつぎのように言つている。「修行者やバラモンが善なる理法に達することがあっても、それを他人に宣説しないほうがよい。人は他人に対してなにをなすことが出来るのか。他人に対して説くことは、あたかも古い束縛を断つてさらに新たに束縛をつくるようなことになる。これは悪いむさぼりの事柄である。」と。他人に説教することは他人を束縛することになる。したがつて説教するより、しないほうが尊いのであるという。そこで説教するのは、一般の宗教家のることで、本当の聖者は説教しないといわれていた。⁽⁵⁶⁾

ところが釈尊は、このよだな当時の慣習や通念を破つたの

である。すべての人々に法を説き示した。あらゆる階級の人々に、今まで教えを聞くなど考へてもみなかつた、また許されなかつた人々にさえも、説法したのである。そこに人々の驚き、有り難さ、関心、そして尊敬の入り混つた気持をもち、心をうれて帰依し出家を志していつたのだと考えられる。

釈尊は初めての説法は大衆に向つてではなくて、少数の五人の修行者であった。かれらに先立つてアーラーラとウッダカの二仙人に説法しようとされたが、かれらはすでに他界していたという。ともかく伝説からすれば釈尊は初めは説法の対手を少数の、そして聞法の有資格者に限られておられた。

仏伝においてみると、殆んどが中心人物となるものを相手にえらび説法をされ、大衆にというより個人への隨時説法をされるのが釈尊の常法であったようである。大衆への説法とは殆んどが弟子たちへの説法であり、一般大衆を目前にして説法されたことは少なかつたというより、なかつたのではないだろうか。弟子たち一人一人もみな一対一の布教伝道説法であつたといえる。このようなことから、説法を聞き理解し信奉することは修行僧となることが前提となつていいたことを知らなければならぬ。⁽⁵⁸⁾ また説法することが慈悲であるとのちになつて考へられるようになつた。⁽⁵⁹⁾

（ハ）見仏

〔具体例〕

○バナレスの五人の修行者が回心し出家した動機は見仏によるものであつたことは前述したことである。（MN. vol. I, pp. 171^t）

○サーガタ（男）はコーサンビーの長者の子。家産傾き浮浪のものとなり、アーナンダにつれられて釈尊のもとに行く。仏足を礼して片隅に坐つていたところ、釈尊は、みずからの食物の半分を与えられた。これをみたサーガラは落涙して喜び、その場で出家したという。（『有部毘奈耶』卷四二（大正二三卷八五七上～八五八上）

○ティッサ（男）は王舎城のバラモン。ヴェーダ学に通曉し五百人の弟子に教授し最高の賞讃と名声とをえた。時に釈尊が王舎城に来られたとき、その釈尊の威厳を見てうだれ帰依し出家した。（Thera G. 153—4 Comy.）

○バフドヒーティ・ブハーラドヴァージャ（男）はコーサラのバラモン。逃げた十四頭の牛を探しているうち、森の中に静坐されている釈尊の姿を見て、その世俗を超えた姿に感ずるところありて、出家した。（SN. 7. 1. 10 cf. Thera G. 537—546 Comy.）

右の諸例をみて分るように、釈尊の容姿、人格にうたれて

信が起り出家したものである。漢訳に「——遙見⁽⁶¹⁾世尊^ニ顔貌端正諸根寂定。見己觀喜善心自生」とあるのは、見仏による帰依を的確に表現したものである。このように釈尊を見てすぐに出家したものがあつたことは、一つには釈尊の容姿人格があまりにもすぐれて、帰依せずにおれない何かをもつておられたことはたしかであろう。釈尊が多数の人々に尊敬されるようになつたのは、無上の明知と行いとを具えておられたからであるとある莊園の領主が述べている。⁽⁶²⁾だから帰依者たちが釈尊を尊敬していたのは、哲学の理論家としてではなくてその人格の偉力によつて感化し、実践の至福の目標への道を教える師であつたからといえる。

このように釈尊の容姿・人格の威力によることも大きな原因でもあつたと考えるが、いま一つの原因と考えられるものは、当時、ブッダの出世を人々は信じ待望していたのが現実となつたこと、すなわち実際にブッダがこの世に出現されたことが驚きと期待をもつて迎えられたことにあり、人々はブッダ出世の噂を聞き一目見たい希望をもつていたのである。

一生においてブッダにまみえることの有りがたさを実感した人々には、出家以外にブッダに接し聞法することの不可能を感じていたのである。

バラモンや他の宗教の修行者たちの中で尊敬と賞讃と名声

をえた指導者の地位にある修行者がいたが、かれらは自らブッダであるとは呼ばなかつた、あるいは呼べなかつたのだろう。ところが釈尊は自らブッダであると言われた。そこでバラモンや、多くの修行者たちが自らをブッダと呼ぶ人物とはどんな修行者なのか、興味を抱いて釈尊を訪れて来たことは疑いないだろう。

仏伝中、ビンビサーラ王の五つの願いや、スダッタが祇園精舎を建立するに至つた経緯などが述べられているのを見れば、ブッダ出世が当時インド人たちの最大の願いであつたことが分る。

右に述べ来つたことなどが見仏の動機を多からしめた理由であろうと考へる。実際、釈尊が帰城の際にその姿をかい間見ただけで出家したという事例は右のような諸理由の事情を意味していると考へる。

(ニ) 世俗の放棄

〔具体例〕

○ヴィーラは大臣の子で、舍衛城のクシヤトリヤ出身。武芸に通じ、武士となる。両親の同意で結婚し一子をもうけたが、人生の浮き沈みに煩わしさを感じ、いや気がさして出家した。妻の還俗を勧める誘惑があつたが、退け、ついに死む。(Thera G. 8 Comy.)

○舍衛城のバラモン・ラーダハは年老いて、いろいろの役務を果すことが出来ず、人々に見はなされるようになつた。

世間に用のない人間であることを感じ、世俗をはなれる決意をする。舍利弗のもとで出家した。(Thera G. 133—4

Comy. cf. Mahāvastu I, 28, 1—6. Dhp. A. II. pp. 104f じゅあむ)。

○マハーカッサペ(男)は「在家生活は障害が多く、塵垢の道であるが、出家の生活は広く大空を楽しんでいる。家に住しては、真珠の母のようにあんぜんとした完全に清らかである清淨行を行う」とは容易でない」として出家した。(SN. 14, 11. 『雜阿含經』卷四) (一一四五) (大正一一三〇三一上) cf. Thera G. 1051—1090 Comy.)

○ヤサの出家。(前出)

○ダンマー(女)は舍衛城のヴァイシャ出身で良家の娘。似合いの夫にめぐりあつたが、結婚生活に嫌悪を抱いてか、出家をのぞんだ。しかし夫には許されなかつたので夫が死んでのやに出家した。(Theri G. 17 Comy.)

○ソーナー(女)は舍衛城のヴァイシャの良家の娘。嫁いで男十人女十人の子持ちとなる。夫の出家後、彼女は二〇人の子供たちにすべてをまかせ財産もほとんど与えた。ところが子供たちは母の面倒をあまり看ず、敬愛しなかつた。

彼女は、いのうな生活を送ることを厭い出家した。(Theri G. 102—6 Comy.)

○アノーペーマ(女)は美人であつた。多くの金持ちの息子たちに結婚を迫まれ安楽な生活を約束され、欲しいものは何でも与えてやると彼らは言つた。ところが彼女は「私にとって在家の生活で利益になるものはなにもない」といつて釈尊のもとに走り出家した。(Theri G. 151—6 Comy.)

世俗生活の放棄という表現は莫然としていて、いずれの出家の動機もこの意味にとれるのであるが、いこでは右の代表的な例をもつてこの動機の内容と考えている。人生に煩わしさ、とくに浮き沈みに心の不安をもち出家したヴィーラ、老いて人生に望みをなくしたラーダハ、歡樂にひたる自己のあわれさを反省したヤサ、在家より出家のすばらしさを真剣に考えたマハーカッサペ、結婚生活への嫌悪を抱いたダンマー、親子の間でさえも、欲得のことで争い、のけものにされ絶望したソーナー、美貌のゆえに、多くの青年に言い寄られ、世俗的欲楽しか満足させてくれない約束に嫌厭したアノーペーマなど興味つきない事例である。このような人たちは、出家者の生活が孤独者の生活であり、世俗とは全く隔絶した生活であつたところから、世俗の煩わしさから逃げ、孤独に憧れたり、世俗生活では得がたい何かを求めて教団に入

つて来たといえよう。一種の逃避場を教団に求めたといえるようである。

階層ではヴァイシヤ出身が多い。この理由は、商工業の発達、経済的財産の蓄積や、現世的快樂の追求などがあくことなく続けられ、物欲の極限に来たとき人間のみにくむとあわれを、そしてそのようなものは希求するに価しないことを出家者たちが指摘し教えたことにあると考えられる。またクシャトリヤ出身が多いことは、国と国との間での政治的陰謀が絶えず、また、武士たちは人間同士の殺人行為に恐怖と嫌厭とを抱き、また自らの生命の危険をもさとり、ここに出家者の中の自由と安らかさとに逃げ場を求め出家したとも考えられる。シカカ国(64)のバッディヤ王が出家してのち「ああ楽しい、ああ楽しい」とつて出家生活を楽んだという話はその証左である。

(ホ) 神変力
〔具体例〕
アッギダッタなどのバラモンやヴァイシヤのヴァッジタは釈尊の双神変を現出されるのを見て信頼を生じて出家した。(65)
○ヴァンギーサは舍衛城のバラモンで、三つのヴヨーダに通じていた。かれは頭蓋呪(66)を修誦し、村や町や王城の中を回

り、人々の信頼をえ、とくにバラモンたちに人気があった。時に釈尊の噂をきき、会いたくなつた。ところが他のバラモンたちは「隠遁者ゴータマは悪智慧をもつておまえを邪道にまよわせるぞ」とつてかれの希望に反対した。しかし、ヴァンギーサは釈尊と呪力くらべをしてしまつた。⁽⁶⁷⁾結果は力の足りなさを知り、釈尊のかくれた特殊な知識をもつて出家した。(Therī G. 1209—1276 Comy. cf. Therā G. 181—2 Comy.)

○誓人が釈尊と詠技を競い、負けて出家したも。(*Avadānaś*, I, p. 93. 『撰集百縁經』一一、⁽⁶⁸⁾大正四卷・1111上中)

○仏の神威力によつて治病されて出家したも。(Therā G. 59 Comy.)

○神威力により高慢な美女が老婆に変えられたために驚き出家したも。(Avadānaś, II, pp. 24—5. 『撰集百縁經』八、⁽⁶⁹⁾大正四卷・1111上)

○誰もが見はなした狂象を手なづけている釈尊の威力をみて出家したも。(Therā G. 211—2 Comy.)

右の事例からしても、いろいろの神威力を發揮されたことが窺える。当時インドでは宗教的に秀れた人物は、しばしば神通力を現わしたといわれる、釈尊は、他の異学の弟子を引

き寄せるために幻術 (māyā) を使う幻術者 (māyāvin) であると非難されたが、一方では神通力によつて偉大な奇蹟を現じうる人であると一般に考えられていたらしい。そこでバラモンたちは神通力の勝負を求め、結果は破れて帰依することになるのが常であつたようである。バラモンの出身者が、この項目で多いのはいかに当時神通力の優劣が宗教者の名声と地位と信用とを左右したかがうかがわれる。クシャトリヤ出身が多いのは、就中武士であつたものが目立つのであるが、かれらは神通力を取得することを出家の動機の一つに考えてもいたように考えられる。

(註)

- 1 Sn. 274, cf. 376.

2 Sutta-Nipāta Commentary. Being Paramatthajotikā II.
Ed. by Helmer Smith. P.T.S., London, 1916.
p.157.

3 丹波元輔『原始仏教の歴史』「釋迦」巻十一(第111頁)。

4 Dhammapada, 175.

5 Sn. 207—221, 376f, 405—47, 805 etc.

6 Thera G. 512 etc.

7 S. Dutt: The Buddha and Five After Centuries,
London, 1957, pp. 30—1

8 Sn. 405.

18 S.N.I. 7, 1, (Vol. I, pp. 160f), Thera G. 14 Comy., 108.

19 渡辺照宏著『新釈尊伝』110七頁参照。

20 ヒのためにシヤカ族の多くの貴族の若い女性たちが余儀なく
独身生活を強じられた。その結果、多くの女性の出家者が出
た。シヤカ族の女性の出家の多かった理由について渡
辺前掲書(1149頁)は述べる。

21 シヤカ族がかなりあるが、ルガムの殆どが親の強制によ
って出家してくる。後出の統計によつて説明される。中村元
博士は「七オド出家したところ人が相当ある以上、かれらは
発心しないたのではなく、社会的あるいは家庭的な他の
理由に基づいて出家したのであるに違ひない」(『原始仏教の

原始仏教教団における出家の動機について（田上）

一四〇

- 成立』「選集」第十一卷一五一页) ふるわれ。石神徳門『宗教心理の研究』折込グラフ第一図やみ七才出家の例が多くとも示してある。四頁参照。
- 22 中村前掲書。「選集」第十一卷一九六頁・一四七頁参照。
- 23 中村前掲書。「選集」第十一卷一八〇頁以下。
- 24 H. Arvon : Le Bouddhisme, (Que Sais-je? No4. 68) 渡辺照宏訳『仏教』六一一四頁。
- 25 Hermann Beckh : Der Buddhismus. Band I. (Sammlung Göschen.) 渡辺照宏訳『仏教』二一六九頁。
- 26 中村・前掲書「選集」第十一卷一四六頁。
- 27 H. Oldenberg : Buddha, 13 Auflage, p. 162.; 豊谷文雄著『東洋思想の形成』一〇九—一〇〇頁; D.D. Kosambi: The Culture and Civilization of Ancient India in Historical Outline, London, 1965,
- 28 中村元著『カータマ・バラダ』「選集」第十一卷一三三四頁。
- 29 中村・前掲書「選集」六二二四頁。
- 30 MN. vol. I. pp. 171 f., Vinaya. III, Mahāvagga, 1.(vol. I. pp. 9-10) 『毘奈雜』卷一 (大正一一卷一〇四一五) 『毘分律』卷十五 (大正一一卷一〇四一五)
- 31 ノの昔がから般陀は自らの詔法のナシ、ノの如ゆを思つたが、スムだ。(C. Eliot : Hinduism and Buddhism, vol. I. p. 141, comy. 2.)
- 32 S. Dutt. : op. cit., p. 43.
- 33 Vinaya, Mahāvagga I, 7, 2.
- 34 33 中村・前掲書「選集」第十一卷三六七—一七〇頁には、ペーリ律藏をサンスクリットと校合し訳出した。
- 35 中村・前掲書「選集」第十一卷一七六—七の訳出文を利用した。
- 36 梵文『四衆經』・漢訳やな六〇人とある。(S. 222-3)『四分律』は五〇人ともある(大正一一卷七九二一上)。『五分律』卷十五(大正一一卷一〇七上)『四分律』卷三三(大正一一卷七九三上～中)参照せよ。
- 37 渡辺照宏著『新釈尊伝』一三三一四頁。
- 38 中村・前掲書「選集」第十一卷一九一四頁。
- 39 33 中村訳による。中村・前掲書「選集」第十一卷一三一四頁。
- 40 39 H. C. Warren : Buddhism in Translation, pp. 87-91, Vinaya, Mahāvagga 1, 23, (vol. I, p. 39f.)『五分律』卷一四 (大正一一卷一六四上以下)
- 41 Mrs. Rhys Davids : Psalms of the Brethren, 1913; Psalms of the Sisters, 1909 が明解で詳しく述べられてゐる。
- (補一) 赤沼智善著『釈尊』三三一四一三三六頁には舍衛城出身の比丘、比丘尼の名前と階層などを挙げてゐる。これを中村元著『カータマ・バラダ』「選集」第十一卷一八二一六頁は訂正整理してある。
- (補二) 王舍城と舍衛城には、最も長く滞在したところが、雨季の安居は舍衛城のほうが多い。舍衛城には110年

- 以上辯在されたところ。赤沼・前掲書三一三頁参照。
- 24 出身者は少いが仏教々団を支える有力な支柱となりたものばかり迦族出身者が多い。オルデンブルグ前掲書。増谷・前掲書二七六頁。赤沼・前掲書一五一一一頁。中村・前掲書「選集」第十一卷三五八頁にはシヤカ族出身の比丘、比丘尼その他をあげてある。
- 43 岩本裕著『仏教入門』一三六頁。一三五頁には階層別出家者の表がのせてある。
- 44 教団内では年長者が尊教めぐらす。(M. Winteritz: Geschichte der Indischen Litteratur, II, S. 24)
- 45 SN. II, p. 279 G.
- 46 中村・前掲書「選集」第十一卷三八七頁。総じてガンジス河の上流地方は、バラモンの本拠地であり、バラモンの勢力が強かつたといふ。
- 47 D. D. Kosambi: Ancient Kosala and Magadha, (Journal of the Bombay Branch Royal Asiatic Society, vol. 27, pt. II, pp. 194-5.
- 48 赤沼・前掲書、三一一八頁。
- 49 中村・前掲書「選集」第十一卷三八七頁。仏教がインドや農民層に根をおいたのが、インドにおける仏教の大いな弱点であったようである。
- 50 赤沼・前掲書二一四頁では、シヤカ族出身の出家者を八名あげる。
- 51 石神徳門著『宗教心理の研究』折込グラフ、第一回参照。
- 52 Dhammapadāṭṭhakathā II, p. 188 では老いを感じて出家したとする。釈利弗の三姉妹四兄弟みな出家したとする。
- 53 この子はのやに出家した。(Thera G. 335-9 Comy.) 聞法し子をすて出家した長者。(Manoratha-purani<ヤマロ>版> p. 227
- 54 出家者の出家の動機を社会的影響の面からみれば、家庭の感化の中、両親共々によるものと、説法の感化によるものが多いことが指摘めぐらす。(石神・前掲書一三三頁)
- 55 中村・前掲書「選集」第十一卷三三〇頁以下
- 56 DN. Lohicca S. vol. I, p. 224
- 57 中村・前掲書「選集」第十一卷三〇三頁。
- 58 アンリ・アルヴォン・前掲書六三三頁。
- 59 Sn. 1065. 中村・前掲書「選集」第十一卷一九九頁
- 60 DN. 3, vol. I, pp. 81-110 『長阿含經』卷十三(大正一卷八三四一八八中) 細照のり也。
- 61 『長阿含經』卷三(大正一卷一〇四)。
- 62 DN. 4, 6 (vol. I, p. 116) 『長阿含經』卷十五(大正一卷九五上)
- 63 類似の例。TheraG. 10 Comy., 34 Comy. (cf. Sn. pp. 70-3)
- 64 Vinaya, Cullavagga VII, 1, 3 (vol. II, pp. 183 f.) ; cf. Udana II. 10, pp. 18f. 細照のり。
- 65 Thera G. 31, 35, 161-2, 240-2, 252-4, 215-6 双神愛めのりのな、身体の苦惱から救出せむたな回転の火と
- 原始仏教教団における出家の動機について(田上)

水とを発出したり、また身体から物が死んで動へぬを覺れ田
して見やる力をもつてゐや。Patisambhidamagga I,
125) 神尊なりの神変を舍衛城でわふたゞくふる。(Milin-
da, ii 247, Dhammapada Commentary, iii, 213f.)
頭蓋骨を指のつめでたたいて鳴らし、その聲音の、以前の脳
住者の再生する処を發見する」とをなす訳。

68 67 66
頭蓋骨を指のつめでたたいて鳴らし、その蓋骨
住者の再生する処を発見する」とおなず呪。
SN. verses, 643, 644

SN. verses, 643, 644